

天才という名の落とし穴

——『フランケンシュタイン』における **genius**——

服 部 慶 子

はじめに

英文学史上有名な「怪物」を創造したヴィクター・フランケンシュタインは、彼が13歳の時に触れた「自然哲学」(natural philosophy)によって、自分の運命が決定づけられたからだと以下のように述べている。

Natural Science is the genius that has regulated my fate ; I desire, therefore, in this narration, to state those facts which led to my predilection for that science. (38)

(自然哲学が私の運命を左右するジニアスでした。ですから、この物語では、私とその学問を好むに至った成り行きの事実を述べてみたいと思います。)⁽¹⁾

(下線部は筆者、以下同様)

ヴィクターが「自分の運命」(my fate)と述べているのは、この語りが彼の死亡する前、ほぼ全てが終了した後に書かれたものであることから、ヴィクターが創り出して彼の破滅をもたらした怪物に関する一連のいきさつであることは明らかである。

その破滅をもたらした「自然哲学」について、それが **genius** と呼ばれていることに本論では着目したい。1人の人間(怪物)という存在を創造する空前絶後の業績を上げたヴィクターは「天才」と呼べるわけだから、一見彼は普通のことを言っているように見える。

しかし、ここでは **the genius** は「自然哲学」のこととされ、彼の運命の破滅となるべき発明をもたらしたものとされていることから、事態はそれほど単純ではない。特にヴィクターの傾倒した学者がコルネリウス・アグリッパという神秘哲学、つまり最も後生に影響を与えた秘学者(occultist)であったことから、その影響に感化されたヴィクターの学問の傾倒が正統な学問にはならないことを予見させる。

本論では特にここでヴィクターを運命付けた **genius** という概念に着目して、ロマン派からヴィクトリア朝文学に頻繁に見られる **genius** の系譜を受け継ぐ作品として本作品を検証する。

genius は *OED* の2番の定義によれば、「生まれた時から人につきまとい、良い影響もしくは悪い影響をもたらすものとして想像されていた二つの相反する霊」という意味がある。**gen-**

ius はヴィクター・フランケンシュタインの才能を開花させ偉大な発明に至らせる良き精霊でありながら、ヴィクター及び被創造者の怪物、そしてヴィクターの最も親しい人々に死をもたらす「悪霊」でもあったのではないだろうか。本論は、「天才」(genius) 的手腕で「怪物」を造り上げながらも、その「天才」とは、実は彼を破滅へと導く「悪霊」という両義的な意味でもあるわけで、genius がこの作品を牽引している重要命題であり、かつヴィクターにとっては、致命的な落とし穴であったことを明らかにしたい。

1. genius に関する先行研究

ジョルジュ・トネリ (1987) は、ラテン語の genius が本来指しているのは、「人間に靈感を与える至高の精霊のことである」と主張する⁽²⁾。OED では genius loci (土地の霊) を「すべてを統轄する神や精霊」のことであると定義している。英文学以外の分野における genius の研究はランゲ・アイヒバウム (1951) など「精神病理学」の分野、トネリなど「ヒストリー・オブ・アイデアズ」の分野、クリスティーン・バタースビー (1990) など「フェミニズム美学」の分野で盛んに議論されてきた。だが、文学における genius の系譜を論じた先行研究はない。例えばアイヒバウムは『天才』(1951) で「ゲニウスとは常に人間の内部にあって人間にはたらしきかけ、高貴な行為を成就させる小さな 1 人の守護神という意味合いで、人間そのものには通常そうした能力はないものと考えられていた」⁽³⁾と指摘しており、この genius はメアリー・シェリーと同時代のブロンテ姉妹の弟ブランウェル・ブロンテの描くそれと等しい。アイヒバウムはまた genius の力を「なにか不気味な残酷なもの、知らぬまに恐怖を生みだすものが崇拜者の背筋に戦慄をもよおさせ、自分が否定滅亡させられるかもしれない」ようなゴシック小説の悪魔的 genius の性質について正確な指摘をしている。また、ルドルフ・ワイトコウアー (1963) によれば、シャフツベリーは「天才」の語に「靈感を得た詩人、即ち巨匠を第二の神、まさしくゼウスの下なるプロメテウス」の性質を見だし、これは現代的天才の定義と同じである。

筆者は、これら他分野で蓄積された研究に鑑みて、genius の意味について考えるようになり、すでにブランウェル・ブロンテについては論文を発表している。本論は、ヴィクトリア朝英国小説の中の genius の系譜考察の一環である。

従来の英文学での研究では、Genii や Genie は単に「悪魔」や「精霊」の言い換えだとして重要視されてこなかった。しかし、ブロンテ家の文学者たちが子供時代に皆で物語を作っていたとき、お手本とされていたのが『アラビアンナイト』であり、そこに登場する精霊は Genii と英訳されている。ブランウェルとその姉妹は子供時代におもちゃの兵隊で物語を作るとき、シャーロット、ブランウェル、エミリー、アンが各自の人形に固有の名前を付けた Genius として登場させていたという事実は示唆的である。姉弟たちは、物語に登場する精霊にインスピレーションを吹き込まれ、自らが能動的精霊の登場人物として振る舞っていたと考えられるからだ。

文学史的な文脈で genius の変遷を考えると、ブランウェルが憧れていた小説家・詩人のジェイ

ムズ・ホッグを始め、ブロンテ姉弟より前の19世紀前半に活躍していたゴシック小説家の作品において、geniusという存在は例えば「悪霊」として大きな役割を果たしている。ジェイムズ・ホッグの『義とされた罪人の手記と告白』(1824)では、主人公ロバートにはドッペルゲンガー的存在の悪霊が付きまとい、主人公を破滅させるに至るが、そのギル・マーチンという男性がまさにこのgeniusという単語で表現されている。アン・ラドクリフのゴシック・ロマンス『ユードルフォの謎』(1794)では、孤児の女性主人公エミリーを叔父のモントーニ伯爵がユードルフォ城に幽閉するのだが、彼女を救い出す男性ヴァランコート(エミリーと恋仲)が常にgeniusと呼ばれ、ゴシック的悪夢から彼女を覚醒させる守護神(=genius)である。しかし他方で、作中の狂乱する登場人物の想像力についてもgeniusという単語が使われ、本作でのgeniusは両義的である。このような研究の一つの例として『フランケンシュタイン』を取り上げる。

2. 「良き精霊」か「悪魔」か

父の反対にもかかわらず、ヴィクター・フランケンシュタインの神秘哲学への傾倒は続き、お決まりの「賢者の石」(the philosopher's stone)や「不死の霊薬」(the elixir of life)の研究に没頭し、「亡霊の蘇り」(the raising of ghosts)に多大な興味を覚えるようになる。この興味は、この後で彼が最初に経験する人生である母の死によって強められ、最終的に、彼が死体を集めて命を吹き込んで「怪物」を造り上げることに結びつく。

ヴィクターは、この「悪霊」の誘惑によって人の道から外れた路をひた走る前に、「守護天使」(the guardian angel of my life)、すなわち「良き精霊」というgeniusに助けられそうになる大きな出来事を経験している。それは彼が15歳になったときのことで、スイスのベルリーヴ近くの別荘で激しい雷雨に遭遇したときだ。すさまじい雷の火が樫の大木を粉々に砕く衝撃を経験したとき、電気光学の知識を耳にして、彼自身雷に打たれたような衝撃を受け、自然哲学(特に神秘哲学)を放擲して数学の道に転向しようと思う。

When I look back, it seems to me as if this almost miraculous change of inclination and will was the immediate suggestion of the guardian angel of my life—last effort made by the spirit of preservation to avert the storm that was even then hanging in the stars, and ready to envelope me. (42)

(いまから振り返って考えてみると、嗜好と意志のこのほとんど奇跡的ともいえる変化は、私の生涯の守護天使の直接の暗示——ちょうどそのとき星座の間に垂れこめ、いまにも私を包もうとしていた嵐を避けようと、保護の霊がなした最後の努力のように思えるのです。)

ここでヴィクターを救済したかもしれないものは「守護天使」であり、「保護の霊」だったとき

れ、genius の良き存在が介入する可能性に触れられるが、逆にその良き面の genius ('the spirit of good' という表現も使われている) が打ち倒され、「悪霊」たる genius がさらに圧倒的にヴィクターを支配することに繋がってしまうように描かれている。「その動かしがたい掟は、もうすでに [ヴィクター] の完全な、恐ろしい破滅を定めていた」(42) のであった。

語り手としてのヴィクターは、物語が破滅に向かうことを明確に示唆してはいるものの、主人公としての現在を生きるヴィクターの青年時代においては、「守護天使」と「破滅の天使」が拮抗しながら格闘を続けているかのように描かれている。インゴルシュタット大学留学時代にも、彼が師事する 2 人の教授は、ヴィクターが若い頃感溺した神秘哲学を軽蔑する教師クレンペと擁護する化学者パルトマンという対立図式になっており、まさに genius の二つの面を担っているとえよう。この 2 人の教師との邂逅を「破滅の天使」(the Angel of Destruction, 45) の導きによるものという語り手ヴィクターは、拮抗する二つの力がいずれは「破滅」に進むものとしているようだ。

ヴィクターの方向性に決定的な言葉を発したのはパルトマン教授であるが、決定要因について、他ならぬ genius の存在を挙げているのは注目に値する。以下はその当該箇所である。

The labours of men of genius, however erroneously directed, scarcely ever fail in ultimately turning to the solid advantage of mankind. (49)

(ジニアスの労苦というものは、たとえその方向があやまっても、究極的には、ほとんど必ずといって良いほど、人類にとって、実質的な利益になるものなのです。)

パルトマンは、ここで「ジニアス」を「天才」という意味で使っているが、これまで見てきたように、この語は両義的であり、「たとえその方向が誤っていても」という但し書きが付けられていることが示すように、ジニアスが「悪霊」である場合、教授の発言は、「悪霊は人類の利益となるものをたとえ作ろうとしても、ほとんど必ずといって良いほど、人間を誤った方向に導くものだ」とも読める。この読みは、次からのヴィクターの行動に如実に実現されていくことになる。

3. ジニアスの創造物

現実を生きている主人公としてのヴィクターは、2 人の思想の異なる教師の下で、「生命の源」はどこにあるのかという人間の根源を突き止めるべく研究に打ち込むのだが、二つの相反する力に突き動かされているヴィクターは、「生命の原因を調べるためには、まず死を研究せねばならない」(To examine the causes of life, we must first have recourse to death, 51) という発想に至っている。彼のこの発想そのものが、生と死、つまり彼の存在につきまといっている二つの genius が持つ相反する二面と重なっているのではないだろうか。

そして遂に彼はある究極の発見をすることになる。

After days and nights of incredible labour and fatigue, I succeeded in discovering the cause of generation and life; nay, more, I became myself capable of bestowing animation upon lifeless matter. (52)

(夜を日について、信じられぬほどの努力と苦労を重ねたあと、私は生殖と生命の原因を発見することに成功したのです。)

ヴィクターは「途方もない労苦」に四六時中のめり込むことになるが、ここで **labour** という単語が使われているのは重要な事実である。**labour** には陣痛・出産という意味があるので、怪物を生みだす苦労についてこの意味がかけられていることは明らかである。さらに注目すべきことは、この語が先ほど引用したパルトマン教授の「ジェニアスの労苦」を明らかに踏まえている点である。彼が「労苦」を厭わず研究に励むのは、自らを教授の言う「ジェニアス」であると確信してのことだと考えられる。ただし、教授の意味はジェニアスの良い意味の「天才」であるが、この後にできあがる「怪物」の行動を見る限り、ヴィクターのジェニアスは「悪霊」の意味だと取らざるを得ないだろう。

さらにヴィクターの次の発言を見ると、彼が自らを世界中のジェニアスの中でも最高の者だと誇っている傲慢さを見ることができる。

I was surprised, that among so many men of genius who had directed their enquiries towards the same science, that I alone should be reserved to discover so astonishing secret. (52)

(これまで多くのジェニアスが、同じ学問に探求の目を向けていたのに、その中で私1人が残って、かくも驚くべき秘密を発見したのだと思うと、肝が潰れそうになったのです。)

この秘密を知った時の様子を天からの光を浴びた様に比べるヴィクターは、ジェニアスの中の最高位のジェニアスであり、天の啓示を得たものと自負している。その様は宗教的であり、メソヂストが天からの光を浴びる様を啓示だと考えることに酷似している。ただ、この様子は、神が恵まれし者に良き精霊を通じて啓示を与えているというよりは、悪魔が悪霊を通じて、呪われた秘密を授けていると読む方が真実に近いのではないだろうか。

ヴィクターが誇りを持って宣言した秘密の発見により、彼は生死の境界を突破して、創造主・父として新しい種族を生みだそうと考える。多くの幸福な、卓越した性質を自らの力で生みだそうとする彼は、まさに神として、被創造者に感謝される父となる自分を夢想している。そして、実際に1人の人間を作る作業に取りかかることになる。だが、彼の父として被創造者にひたすら感謝されようとする動機に関しては、倫理的過誤が含まれてはいないだろうか。彼の想いを以下の引用で見えてみよう。

A new species would bless me as its creator and source ; many happy and excellent natures would owe their being to me. No father could claim the gratitude of his child so completely as I should deserve theirs. (54)

(新しい種族がこの自分を、その創造主、その源泉として祝福するだろう。多くの幸福な、卓越した性質が、私のおかげで生まれ出るのだ。いかなる父親といえども、その子供の感謝を受けるのに、私ほど完全な資格を持った者はいないだろう。

しかし、そもそも自分自身の父が反対する思想に没頭し、生物（怪物）作りにかまけて、父を忘れて便りさえ送らなかったヴィクターは、自分を生んでくれた父に感謝していたとは言えないだろう。ヴィクター自身、長い間家族を忘れて神ならぬ悪霊の創造行為に没頭したことを意識してはいるのだが、「もし父がこの無沙汰を、悪に身を染めたためだとか、私の方に何かの不行き届きのせいにするなら、それは父が間違っているのだ」(55)と考えていた。父への忘恩の徒たるヴィクターが、自分の産み出す存在の感謝に何ら疑義を感じていないとすれば、傲慢と言わざるを得ない。自らそうだと思いついた天才=geniusに酔いしれて、悪しきgeniusに駈られて熱狂的活動にのめり込む様は、そもそも驕慢な態度であり、その結果生まれる被創造物がそのような作り主に従順であることは到底期待できないであろう。

4. 怪物が怪物になる

ヴィクターがほぼ2年を費やして創り出した被創造物は、案の定「下劣で惨めな怪物」(the wretch—the miserable monster, 58)で、「悪魔に取り憑かれた死体」(the demoniacal corpse, 58)であった。悪霊たるジニアスに唆されて創り出したものは、当然「悪霊に取り憑かれて」いるであろう。その形相を見て気を失ったように昏睡したヴィクターは、夢で母親の死体がウジ虫にたかられている様を見る。この夢は、ヴィクターが死から生を奪い返したいと考えた根本の理由は、死んだ母親を生き返せなかったからなのかもしれないと読者に感じさせる。

しかし人間には許されない死から生への復活の試みの結果、ヴィクターは世にも醜い怪物しか生み出すことができなかった。本来存在してはならないものが世に産み出されたのであるから。この後で逃げ出した怪物は、ヴィクターの弟ウィリアムを殺害し、ウィリアム殺人の嫌疑をかけられたフランケンシュタイン家の愛すべき同居人ジュステイーヌは有罪となり絞首刑に処される。

ただ、怪物は産み出された瞬間から心が墮落していたわけではない。死体の寄せ集めで作られ、部分部分を継ぎ合わせた都合で巨体とならざるを得ず、かつ醜い外観とならざるを得なかったのである。作品半ばに挿入された怪物自身の話す物語によると、当初は何も分からない無力な存在であり、人との繋がりを求め、ある農家の横にある掘っ立て小屋に住み付き、その住民を観察することで、言葉を覚え、知識を蓄えることになる。向上心に溢れており、内面はイノセント

だったと言えるだろう。

家の若者フェリックスがアラビア娘に教育を施す様を見て、怪物は高い教養を身につけていくのだが、その様子は以下のようなのである。

I heard of the slothful Asiatics; of the stupendous genius and mental activity of the Grecians; of the wars and wonderful virtue of the early Roman—of their subsequent degenerating—of the decline of that mighty empire; of chivalry, Christianity, and kings. I heard of the discovery of the American hemisphere, and wept with Safie over the hapless fate of its original inhabitants (119)

(私は怠惰なアジア人のこと、ギリシャ人の仰天するような天才たちのこと、彼らの精神の活発さのこと、初期ローマ人たちの戦争と驚嘆するような美徳——その後の彼らの墮落——その強大な帝国の衰退、騎士道、キリスト教、もろもろの王たちの話もあった。おれはアメリカ大陸発見の話聞き、その原住民の不運な運命に、サフィとともに涙を流した。)

ここで使われているジニアスは純粹に「天才」という意味であり、小説冒頭部で分析したような、ヴィクターに纏わる二重の意味を帯びた複雑で本質が見えないジニアスとは全く異なっている。怪物は純粹な向上心で人間のことを知ろうとするのである。しかし怪物が人類について得た知識とは、強大な力を持ち徳に富み雄大でありながらも、邪悪で卑劣な行動も行うという二面性であった。つまりジニアスの純粹・肯定的意味を探りながらも、結局人類が二面性を持ち、ジニアスの悪徳に陥るのが常であるということだ。怪物は人類に嫌悪と吐き気を覚えるようになる。知恵を得ることが墮落に繋がるという『創世記』から人類に纏わる罪を悟るのだ。

温かい家庭を持つ有徳なフェリックス一家に影ながら愛情を感じていた怪物だが、姿を現すことで嫌悪の対象となり、結果的にフェリックスの家を焼き払うことで、関係を断ち切ってしまう。好意を持つ人々に嫌悪される同様の経験を重ねるにつれ、当初持っていた純粹な愛情は、すさまじい憎悪に取って代わり、彼は殺人を重ねる外見も中身も真の意味での怪物に成り果ててしまう。しかし、これは怪物のみに責任があるというよりは、人類の持つ二面的ジニアスの欺瞞が怪物を真の怪物に変貌させたと言ってもいいだろう。

5. 怪物が怪物を追う

怪物はヴィクターに要求する。自分は他人に忌み嫌われ孤独で一人つきりにならざるを得ない存在なので、パートナーとなる女性の怪物を新たに造ってくれと。この要求は、神がアダムを創った後、連れ合いの女性のイブを創ったという聖書の記述を知っているかのようである。怪物はそうしてくれれば遠く南アメリカで人目につかないように暮らすと言う。これ以上世間で犯罪を繰り返させないために、ヴィクターは承諾する。怪物が女性の怪物との暮らしを夢想して、その

(116)

創造をヴィクターに頼む場面を見てみよう。

It is true, we shall be monsters, cut off from all the world ; but on that account, we shall be more attached to one another. Our lives will not be happy, but they will be harmless, and free from the misery I now feel. Oh! my creator, make me happy… (145-6)

(確かに俺たちは怪物のカップルとなり、世間とは隔絶されるだろう。でもそれだけに、俺たちはいっそうお互いを愛し合うことになるだろう。俺たちの暮らしは幸福にはならないだろうが、害悪を及ぼすこともなく、俺がいま感じているこの惨めさからも解放されるだろう。我が創造主よ、俺を幸福にしてくれ。)

怪物は「幸せ」について矛盾したことを言っているが、社会から隔絶されつつも2人きりの幸福な生活を夢想していることは事実であろう。

女性怪物を造るという意図で向かったイギリスの場面で、この作品で *genius* という単語が使われている。当該箇所を引用する。

LONDON was our present point of rest ; we determined to remain several months in this wonderful and celebrated city. Clerval desired the intercourse of the men of genius and talent who flourished at this time ; but this was with me a secondary object ; I was principally occupied with the means of obtaining the information necessary for the completion of my promise, and quickly availed myself of the letters of introduction that I had brought with me to the most distinguished natural philosopher. (157-8)

(ロンドンをさしあたっての滞在地として、このすばらしい、有名な都市に数ヶ月足を止めることにしました。クラールは当時盛名をうたわれていた天才、才人たちとの交際を願いましたが、これは私にとっては二の次のことで、私は主として、自分の約束の実行に必要な情報を得ることに従事して、もっとも有名な自然哲学者宛の、国からもってきた紹介状をさっそく利用したのです。)

ヴィクターの親友クラールはジニアスを持つ人々との交際を望み、ヴィクターは自然哲学者を求めた、という何気ない文章だが、悪霊としてのジニアスによって造られた怪物がこの後、クラールを殺害することを考えると、示唆的である。また、ヴィクターはしばらく遠ざかっていた悪魔の学問である、本論の最初で触れた「自然哲学」に回帰していることから、再び善悪両面を含むジニアスが交錯する状態になっていることが確認される。

ヴィクターは、頼まれた女性怪物を半分完成した段階で、この女性と怪物が子供を作り、将来に怪物一族が増えていく様を想像し、作りかけの女性怪物を破壊してしまう。怪物は、カップル

として社会を離れ、二人きりの幸せな生活を夢想してただけに、まだ完成はしていなかったとは言え、愛する者を奪われたわけで、当然のように狂乱する。怪物がヴィクターの愛する人たちを殺して行く過程を、ヴィクター本人が怪物に対して行ったに等しい。この行為は、理由は何にせよ、ヴィクターを怪物的存在に変貌させてしまう。怪物自身がこのことに言及している。

'Slave, I before reasoned with you, but you have proved yourself unworthy of my condescension. Remember that I have power; you believe yourself miserable, but I can make you so wretched that the light of day will be hateful to you. You are my creator, but I am your master; --Obey! (167)

(奴隷よ、以前はおまえに道理を聞かせてやった。が、おまえはそこまで丁重に扱ってやる値打ちもないやつだと、自分で証明してみせたのだ。忘れるなよ、おれには力がある。おまえは自分が不幸だと思っているが、おれにはおまえを、日の目を見るのもおぞましいと思うほど、みじめな人間にしてやる力があるのだ。おまえは俺の創造主だが、おれはおまえの主人なのだ——従うがいい。)

ここで怪物は、ヴィクターが女性怪物の破壊（怪物にとっては殺人に等しい）を行ったことによって、主従関係が逆転したことを宣言しているのだ。人の生死を操る秘密を知った時、ヴィクターは「天からの光を浴びた様」に比べていたが、ここでは怪物によって光を奪われているように読める。彼の宗教は光を失い、破綻してしまう。同時にここは、ヴィクター自身が怪物に変貌した瞬間だと言えるだろう。

実は、故国を離れる時、ヴィクターは婚約者エリザベスと結婚することを決心している。そのことを「惨めな奴隷状態 (my miserable slavery) から解放されて、エリザベスに求婚し、彼女との結婚に過去を忘れることができる日が来るのだという見込み」(153) だと述べる。この段階で「奴隷状態」とは、怪物のためにパートナーの女性怪物を造らなくてはならない状態のことを指している。しかし、ヴィクターはその女性怪物を破壊することで、より深い奴隷状態、つまり怪物の奴隷と成り下がってしまうわけだ。

前の引用で呪詛の言葉を述べた怪物だが、捨て台詞として「おまえの婚礼の晩には出てやるからな」と言い、友人クラーバル殺害の後、予言通りヴィクターの婚約者エリザベスも殺害してしまう。エリザベスを殺されたヴィクターは復讐の鬼（怪物）と化し、怪物を追いかけて北極海への氷原の中を追跡することになる。

6. 終わりに——人間みな怪物

genius という概念を巡って、『フランケンシュタイン』を検証したが。ジニアスの導きで生物を創出したヴィクター・フランケンシュタインは、自らの幸福な家庭という小さな社会を壊さ

れ、愛する人たちを失う。心ならずも産み出されて悲惨な生涯を送る怪物も、恋人との幸福になるはずだった生活を奪われ、小さな社会の成立は叶わなくなった。これら全ての契機となったジニアスは、この作品では、登場人物たちを悲惨さに落とし込む器だったと言わざるを得ない。

最後にヴィクターの弟ウィリアムが死に、その科でジュスティーンが処刑された後、ヴィクターの恋人エリザベスが言う言葉を見てみよう。これは、作品全体のあり方を的確に言い当てていると思われる。

‘When I reflect, my dear cousin,’ said she, ‘on the miserable death of Justine Moritz, I no longer see the world and its works as they before appeared to me. Before, I looked upon the accounts of vice and injustice, that I read in books or heard from others, as tales of ancient days, or imaginary evils; at least they were remote, and more familiar to reason than to the imagination: but now misery has come home, and men appear to me as monsters thirsting for each other’s blood. (92)

(「愛する方)、と彼女は言いました。「ジュスティーン・モリッツの不幸な死を思い出すと、この世とこの世のいとなみは、もう昔と同じものとは思えなくなります。以前には、悪徳や不正の話の本で読んだり、話で聞いたりしますと、それは古い時代の物語、あるいは絵空事の悪事と考えたものでした。少なくともそれは縁遠いもので、想像力よりも理性の方になじむものだったのです。ところが今、我が身に不幸が訪れてみますと、人間は互いに相手の血を渴き求めている怪物のように思えるのです。」

このエリザベスの言葉は、怪物がフェリックスから聞いた人間の二面性を描く（特に邪悪側に比重を置く）物語を彷彿とさせる。殺害者の怪物と被害者エリザベスは、「人間は互いに相手の血を渴き求めている怪物」だという認識を不思議なほど強く共有しているのだと考えられるだろう。

この作品が提示する「人間みな怪物」という認識は極めて絶望的だ。しかし、そうでありながらも社会は怪物を生起させないシステムの上に脆弱なバランスを取って進んで行く。その脆弱なバランスを良き方向にも悪い方にも転がす駆動力、それがまさに **genius** であり、この作品はこの **genius** によって、悪しき側にも落ちてしまうのである。

注

- (1) 原作は次の版に依る。Mary Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus* (Oxford: OUP, 2008). 翻訳は白田訳に準じ、筆者の判断で適宜変更を加えた。白田昭訳『フランケンシュタイン』(国書刊行会、1979)。
- (2) ジョルジュ・トネリ「天才—ルネサンスから一七七〇年まで」、『天才とは何か』(平凡社、1987年)所収。
- (3) ランゲ・アウヒバウム『天才——創造性の秘密』島崎敏樹他(みすず書房、1953年)、p 15。

引用・参考文献

Hogg, James, *The Private Memoirs and Confessions of a Justified Sinner*. Oxford : OUP, 2010

小野俊太郎『フランケンシュタイン・コンプレックスー人間はいつ怪物になるのか』(青草書房、2009年)

武田悠一『フランケンシュタインとは何かー怪物の倫理学』(彩流社、2014年)

武田悠一・武田美保子編『増殖するフランケンシュタイン』(彩流社、2017年)

ルセルクル、JJ『現代思想で読むフランケンシュタイン』(講談社、1997年)